

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

東京音楽大学付属民族音楽研究所所蔵楽器の紹介(1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小日向, 英俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/936

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



東京音楽大学付属民族音楽研究所所蔵楽器の紹介 (1)

本学講師：音楽学・付属民族音楽研究所
小日向 英俊

本稿では、本学付属民族音楽研究所が収蔵する世界の様々な楽器コレクションの一部を紹介する。具体的な楽器・音具を見ることにより地球上の様々な地域の音楽への関心を高め、さらに音楽教育全般と世界音楽教育に不可欠な資料として活用する目的で情報提供を行う。

また、今回の情報提供に当たり所蔵楽器に関する基礎調査を開始した。この過程で、楽器学的基礎情報の収集、管理および提供についての問題点も発見できた。本稿を、これらの諸問題解決の契機として捉え、コレクションの充実を図りたい。

キーワード：楽器学、楽器コレクション、音具、楽器資料の教育資源化、東京音楽大学付属民族音楽研究所

1 はじめに

東京音楽大学付属民族音楽研究所（以下、「研究所」）は、欧州の楽器を含む様々な楽器資料を収蔵しているが、この楽器コレクションの存在は、これまで積極的に紹介されていなかった。資料総点数は決して多くないものの¹、学部授業では扱うことが頻繁ではない異文化の楽器を限られた予算枠の中で収集している。

一方で、所蔵するジャワ・ガムランのセットは、学部授業「特別実技科目 ガムラン演奏コース」（1980年4月開講）や、社会人講座「ガムラン音楽教室」（1996年4月開講）、および「アジア音楽の理論と奏法」と、大学院・付属民族音楽研究所主催民族音楽等社会人特別講座（2013年4月開講）などで実技指導に利用されており、単に陳列するものではなく利用するものであるとの認識のもとで、研究所が活用してきた側面もある。またその他の楽器も、短期型の研究所主催民族楽器入門講座において実技用として活用されている。

ただこうした楽器資料が、学内における教育資源として十全に公開、利用されてきたかについては多少の疑義がある。これまでに冊子体または Web 上でも所蔵楽器目録の発行はなく²、本学教員・学生、および社会からもそのコレクションの存在は不可視であるからである。コレクションの価値は、研究に基づく情報生成とその公開性にあると、筆者は考える。実物楽器を見る・触れることを通じて世界の音楽についての知見を広める機会が、上記授業を履修したごく一部の学生への限定的提供にとどまっていることは残念である。

本稿では、研究所が現在まで収集した楽器コレクションの概要を紹介するとともに、コレクションの一部を紙面で紹介し、また今後の収集のありかたや方向性を考察する。また、文末に

¹ 資料総点数は、およそ 300 点ほどである。

² 2013 年の 9 月 22 日より、収蔵する明清楽器（伊福部昭寄贈）についての資料公開が開始された (<http://www.tokyo-ondai-lib.jp/minshingaku/> を参照のこと)。

は本稿掲載楽器に関する参考文献および入手しやすい視聴覚資料を掲載した。これらの情報により、楽器資料が有機的に活用可能な教育資源となることを目的としている。

2 楽器コレクションの概要

本研究所は、故伊福部昭本学名誉教授（当時本学学長、現在は研究所名誉所長）が関わり、1975年に作曲研究室内に設立された。当初より楽器収集活動が行われた。1979年には、インドネシア、ジャワ島スラカルタ市のマンクヌガラ Mangkunegaran 王家関係者より、伝統楽器ガムランのセットが購入され収蔵された。上記のように、このセットは学部授業にも活用されている。

研究所の独立建屋への移設当時（1991年）に所有していた、上記ガムラン楽器以外のコレクションは、欧州の民俗楽器などを含む約30点であった³。またこの時点で、伊福部が個人として所有していた明清楽器が研究所に寄託され、その後2011年に正式に寄贈され収蔵された〔鳥谷部 2012、塚原 2012〕。また研究所の研究目的の一つであるアイヌの人々の音楽研究を反映して、伝統楽器トンコリ3台やムックリを収蔵していることも当コレクションの特徴でもある。その他の楽器収蔵品の原産地は、南米、西アジア、南アジア、東アジア、アフリカ、オセアニア地域に及ぶ。現在、これらの楽器の博物館学的、楽器学的情報整理と研究を実施中である。

3 所蔵楽器の紹介

研究所所蔵楽器の一部を、写真とともに紹介する。楽器を地域や国から、または楽器の構造からも調べられるよう、HS楽器分類表の部門番号および分類項目番号を含む一覧を以下に掲載する。本稿では、HS楽器分類表第1部門の体鳴楽器、および第3部門の弦鳴楽器、計15点を掲載する。また、各楽器に関する詳細情報を入手できる文献、および同名楽器または同型楽器の演奏例を視聴できる視聴覚資料を「5参考文献」に掲載した。掲載資料は網羅的ではないが、国内で入手可能なものを優先した。

³ 研究所が管理する楽器リストによる。

表 1: 掲載楽器一覧⁴

No.	楽器名	HS番号*(1)	地域	国名(生産地)	登録番号	購入日
01	キハーダ Quijada	111.211	南米 005	ペルー PER	51	1999/03/25
02	バラフォン*(2) Balafon	111.212	西アフリカ 011	ブルキナ・ファソ BFA	15	1994/04/21
03	グンデル・バルン*(3) Gender barung	111.222	東南アジア 035	インドネシア IDN	G-8-4	1979/08/31*(5)
04	サロン・バルン*(4) Saron barung	111.222	東南アジア 035	インドネシア IDN	G-7-9	1979/08/31*(5)
05	ゴン・アグン Gong ageng	111.241.11	東南アジア 035	インドネシア IDN	G-1-2	1979/08/31*(5)
06	クノン*(4) Kenong	111.241.21	東南アジア 035	インドネシア IDN	G-5-6 G-5-7	1979/08/31*(5)
07	ボナン・バルン*(4) Bonang barung	111.241.21	東南アジア 035	インドネシア IDN	G-4-1	1979/08/31*(5)
08	グンタン Guntang	312.11-4	東南アジア 035	インドネシア IDN	19	1995/03/27
09	トンコリ Tonkori	314.122-5	東アジア 030	日本 JPN	03	1992/05/12
10	ルバブ Rebab	321.311-71	東南アジア 035	インドネシア IDN	N/A	不明*(7)
11	チャランゴ Charango	321.321-5	南米 005	ボリビア BOL	12	1994/04/21
12	シタール*(6) Sitār	321.321-6	南アジア 034	インド IND	N/A	2013/06/04
13	ウード 'Ud	321.321-6	西アジア 145	トルコ TUR	55	1999/03/25
14	サーランギー Sāraṅgī	321.321-7	南アジア 034	インド IND	04	1994/04/21
15	サウン・ガウ Saung-gauk	322.11-5	東南アジア 035	ミャンマー MMR	50	1999/03/25

* (1) 該当番号の詳細については、付録1: 「HS番号について」を参照。

* (2) 現地における固有名称は不明だがバロ(Balo)である可能性もある。

* (3) ベログ音階バラン調

* (4) スレンドロ音階

* (5) 1979年8月ではあるが、正確な日は不明。使用履歴のあるものを購入。

* (6) 一般には「シタール」

* (7) 台帳に登録のある6台のいずれに相当するか、不明。

• HS 楽器分類法における分類番号と接尾番号について

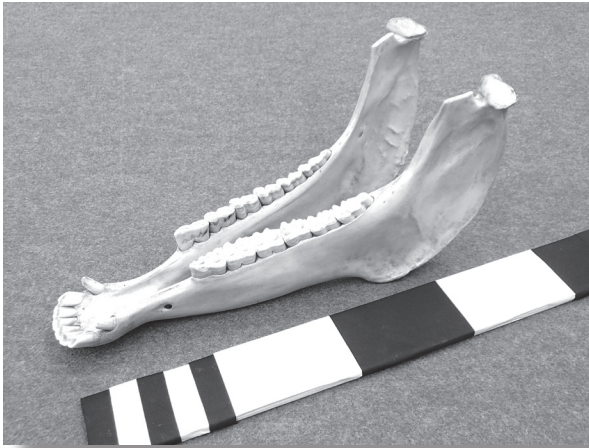
HS 楽器分類法には、1914 年ドイツ語初版 ([Hornbostel and Sachs 1961] の書誌付記事項参照) と 1961 年改訂版が存在し、その後も国際博物館会議 (ICOM) の下部組織である、楽器の博物館とコレクション国際委員会 (CIMCIM) が、オンライン楽器博物館コンソーシアム (MIMO (musical instrument museums online) Consortium) と協力しながら、時代の変化に応じた要請と研究成果を取り込みながら改訂を行っている⁵。本稿では、これら最新の改訂状況を反映させるとともに、各部門に特有の発音体を振動させる原因を示すために付与する接尾番号のセットも利用する。また日本語訳については、1961 年版の邦訳 [Hornbostel and Sachs 1995] と改訂英語版 [MIMO Consortium n.d.] を参考にしている。

⁴ 掲載する地域名と国名は、国連統計部が発表する地域名および国名とその 3 桁コードとアルファベット 3 文字の ISO ALPHA-3 コード [United Nations Statistics Division 2013]、HS 楽器分類表は [MIMO Consortium n.d.] に基づく。

⁵ ICOM = <http://icom.museum>
 CIMCIM = <http://network.icom.museum/cimcim/>
 MIMO Consortium = <http://www.mimo-international.com>

3.1 第1部門：体鳴楽器

膜や弦を張ることなく、その個性性と弾力性により振動し音を発する物体を音源とする音具⁶。



1. キハーダ

L. 375, W. 163, D. 170 (mm)

名称言語：スペイン語

製造国：ペルー

製造年：不明

説明：中南米音楽で使用される体鳴楽器。ロバまたは馬の顎の骨で作る。片方の骨を握り、もう一方の手で叩く。



2. バラフォン

W. 1315, H. 387, D. 601 (mm)

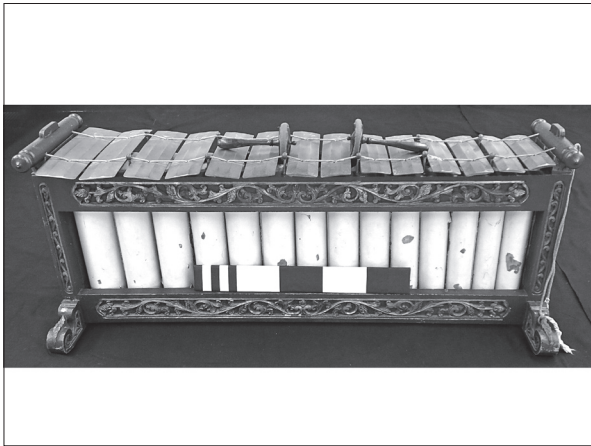
名称言語：アフリカ諸語

製造国：ブルキナ・ファソ

製造年：不明

説明：西アフリカ諸国で演奏されるザイロフォンの一種。打奏板の下にはふくべで作り、蜘蛛の巣のミリトンを付けた共鳴器を備える。収蔵物の打奏板は18枚。

⁶ 用語「音具」は、ホルンボステルによる Sound instruments の定義「音を出すことが意図されたものはすべて楽器とみなされねばならない」[Hornbostel 1933]による。「音楽」の意味は文化により多様であるため、ここでは上位概念「音具」を採用して、多様な音文化の表現に利用される道具 (= 音具) を示す。



3. ゲンデル・バルン

W. 1125, H. 465, D. 325 (mm)

名称言語：ジャワ語

製造国：インドネシア

製造年：不明

説明：青銅製打奏板 14 枚、ブリキ製筒型共鳴体 14 本の構成。音域は 2 オクターブ半あり、バルンガン（骨格）旋律用。木製バチ 2 本で打奏。購入時までの修復・改造履歴は不明。



4. サロン・バルン

L. 750, H. 230, D. 180 (mm)

名称言語：ジャワ語

製造国：インドネシア

製造年：不明

説明：青銅製打奏板 7 枚、木製共鳴胴の構成。サロン類の中で中音域を担当。ハンマー状木製バチ 1 本で打奏。



5. ゴン・アグン

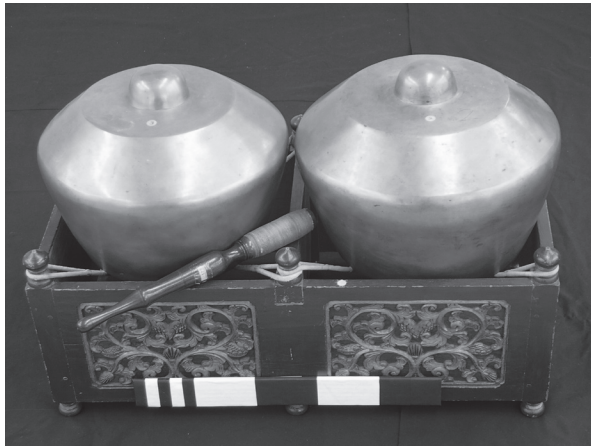
W. 1560, H. 1280, ϕ 920 (mm)

名称言語：ジャワ語

製造国：インドネシア

製造年：不明

説明：青銅製コブ付ゴング。最大サイズのもので、リズム周期の重要な拍に打奏する。「アグン」は、「大きい」の意。



6. クノン

W. 820, H. 350, D. 406 (mm)

単体ゴング（6の音）のサイズ
の参考値：H. 320, φ 375 mm

名称言語：ジャワ語

製造国：インドネシア

製造年：不明

説明：平置型コブ付きの青銅製
ゴング・チャイム。木製バチ1本
でコブの部分进行打奏。



7. ボナン・バルン

W. 1690, H. 540, D. 640 (mm)

名称言語：ジャワ語

製造国：インドネシア

製造年：不明

説明：平置型コブ付きの青銅製
ゴング・チャイム。打奏容器12
個と木枠の構成。木製バチ2本で
打奏。約2オクターブの音域。バ
ルンガン旋律を分割して装飾す
る。

3.2 第3部門：弦鳴楽器

固定点の間に、単数のまたは複数の弦を張り渡した音具。

HS 楽器分類法において弦鳴楽器は、大きく以下の2種に分類される：1. 単純弦鳴楽器またはツィター（下位分類番号：31）、2. 複合弦鳴楽器（下位分類番号：32）。その上で後者は、リュート（下位分類番号：321）、ハーブ（下位分類番号：322）、およびハーブ・リュート（背高弦留めのある差し込み柄式ハーブ）（下位分類番号：323）の3種に分割される。

以下に、各分類項目の定義を示す [MIMO Consortium n.d.]。

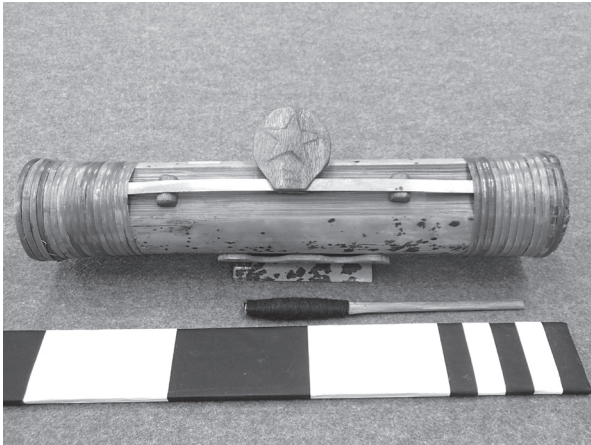
1. 単純弦鳴楽器またはツイター（下位分類番号：31）：弦受台のみから構成される、または不可欠ではなく発音機構を破壊せずに取り外し可能な共鳴器を備える弦受台のみから構成される弦鳴楽器。

2. 複合弦鳴楽器（下位分類番号：32）：弦受台と共鳴器が有機的に結合され、これらを分離するとそれ自体が破壊される弦鳴楽器。

3. リュート（下位分類番号：321）：弦の構成平面と共鳴板が平行な弦鳴楽器。

4. ハープ（下位分類番号：322）：弦の構成平面が共鳴板に対して垂直である弦鳴楽器。弦の下端を結ぶ直線は、柄の方向に向く。

5. ハープ・リュート（背高弦留めのある差し込み柄式ハープ）（下位分類番号：323）：弦の構成平面が共鳴板に対して垂直である弦鳴楽器。背高弦留めまたは駒が複数弦を保持する高さが、連続的に異なる。その振動弦長は、共鳴板から遠くなるほど長く、本体形状は差し込み柄リュートに酷似し、柄はふくべ製共鳴体の中心を通る。



8. グンタン

L. 415, ϕ 85 (mm)

名称言語：バリ語

製造国：インドネシア

製造年：不明

説明：竹製切り出し弦式筒ツイター。竹製バチ1本で弦を打奏。バリ・ガムランの演目アルジャで使用。



9. トンコリ

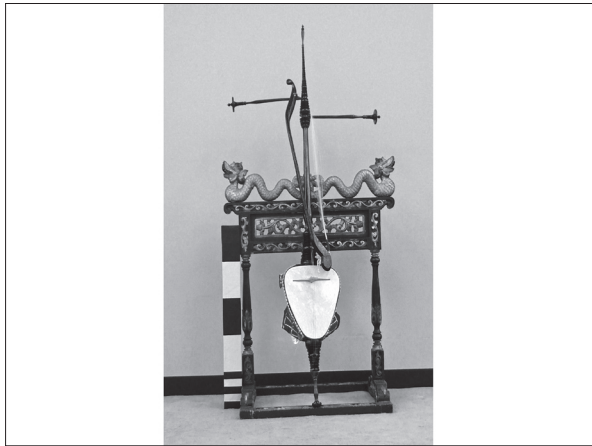
L. 1092, W. 290, D. 79 (mm)

名称言語：アイヌ語

製造国：日本（旭川）

製造年：不明

説明：別名はカー。5弦を有する板型ツイター。弦には動物の足筋などを利用したが、現在は三味線用弦を使用する。元々樺太アイヌの楽器であった。



10. ルバブ

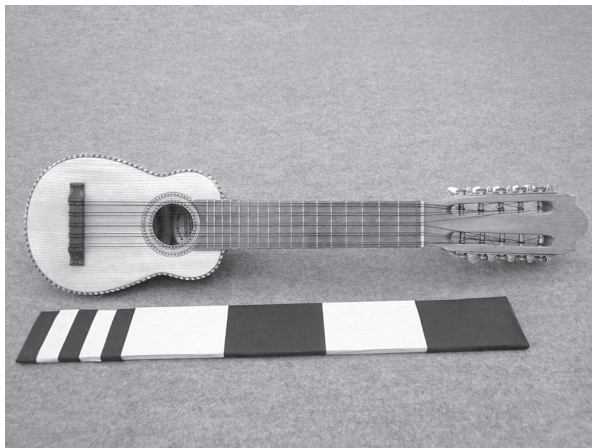
L. 1090, W. 538 (mm)

名称言語：インドネシア語

製造国：インドネシア

製造年：不明

説明：2弦を有し弓奏する鉢型差し込み柄リュート。水牛の膀胱や腸の薄膜の表面板と木製共鳴胴の構成。



11. チャランゴ

L. 630, W. 157, D. 88 (mm)

名称言語：スペイン語

製造国：ボリビア（コチャバンバ市、Pedro Soto 氏の工房）

製造年：不明

説明：アルマジロの甲羅の共鳴胴、木材の表面板の構成。弦は5コース10本。南米にもたらされたギターなどから考案。



12. スィタール（シタール）

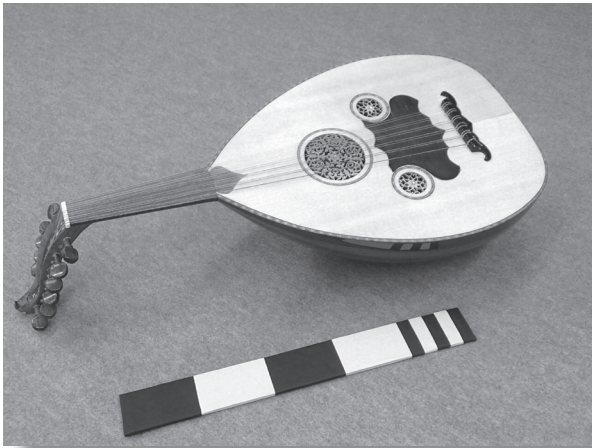
L. 1210, W. 356, D. 320 (mm)

名称言語：ヒンディー語

製造国：インド（コルカタ市、Radhakrishna Sharma 工房）

製造年：2012年頃

説明：ふくべ製共鳴胴、木製共鳴板の構成。金属製主要弦7本と共鳴弦11本。



13. ウード

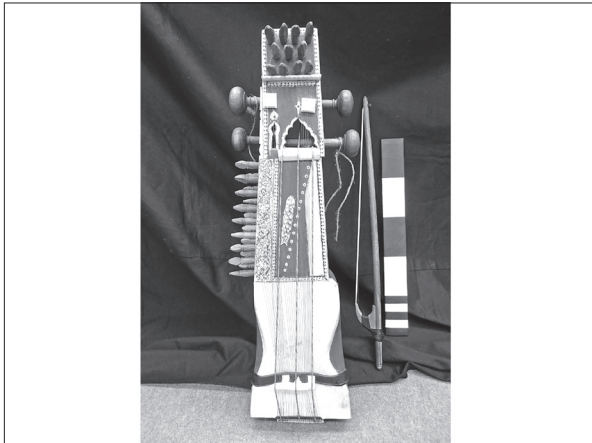
W. 805, H. 375, D. 201 (mm)

名称言語：アラビア語

製造国：トルコ (Cakanlar
Müzik Ltd.)

製造年：1998年1月1日

説明：寄せ木細工による共鳴
胴と木製表面板の構成。弦は、6
コース11本。プレクトラムは欠
品。



14. サーランギー

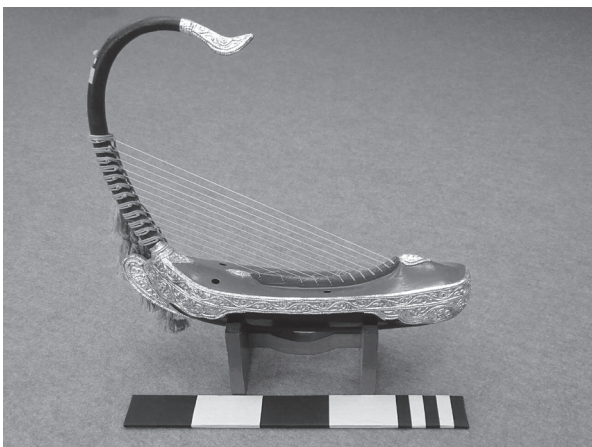
L. 673, W. 233, D. 170 (mm)

名称言語：ヒンディー語

製造国：インド

製造年：不明

説明：一木造りの共鳴胴にヤギ
革の表面板の構成。ガット製主要
弦3本と金属製共鳴弦25本の構
成。芸術音楽用モデル。



15. サウン・ガウ

L. 540, W. 109, H 456 (mm)

(ミニチュア)

名称言語：ビルマ語

製造国：ミャンマー

製造年：不明

説明：南アジアに起源を持つ弓
型ハープ。演奏用楽器のサイズ
は、約900mm (L)。

4 今後に向けて

本稿では、研究所が収蔵する楽器のごく一部について紹介した。現在まで、収蔵楽器に関する楽器学・音楽学的研究、および情報整理に遅滞が見られ、楽器の外形寸法の計測も行われたことがないことが判明した。その背後にある楽器に対する考え方は、「楽器を生きた姿で活用する」であることは、「1. はじめに」でも触れた。そのために、これらのコレクションは資料として客観的に扱われてこなかったのである。

楽器を取り扱う博物館や資料室においては、収蔵品の研究と保存を行い、得た知識を社会へ公開することが求められている。また同時に、楽器は触れなければ理解できないことも確かであり、各館は来場者に対して生きた楽器の姿と情報をどのように伝えるかで、常に悩みながら活動を行っていると思われる。つまり資料としての「モノ」と、演奏のための「楽器」のトレードオフ関係に悩んでいるのである。本研究所の場合は、これが「楽器」の立場に大きく振れ過ぎた結果、コレクションの公開についても比較的消極的になったものと思われる。

本稿を契機に、これらを「モノ」として扱い研究が進み、客観情報を含めた楽器誌が構築されれば本学および社会に対して、知的貢献および芸術的貢献が可能になるだろう。

本稿執筆に当たっては、研究所講師木村佳代氏が写真撮影および情報収集に手をさしのべてくださった。また研究所専任研究員甲田潤氏からはアイヌ楽器について助言をいただいた。講師の樋口文子氏には、ガムラン音楽について数々の助言をいただいた。また、本稿執筆について助言をいただいた研究所副所長糺場富美子および藤原豊両教授、および本稿掲載の機会を与えてくださった東京音楽大学附属図書館館長坂崎則子教授および事務長稲葉良太氏、その他目に見えない支援を下された関係者の方々に、本誌面を借りて感謝の意を表したい。

5 参考文献

凡例：以下の省略記号を利用する。

- NGDMI* = Sadie, Stanley (ed.)
1997 *The New Grove Dictionary of Musical Instruments*.
(First edition: 1984). London.
- NGSODJ* = Sadie, Stanley 他 (編)
1995 『ニューグロヴ世界音楽大事典』. 東京.

5.1 楽器・楽器学全般に関する文献と視聴覚資料

Beck, John H.

- 1995 *Encyclopedia of Percussion (Garland Reference Library of the Humanities Vol. 947)*. New York.

Diagram Group

- 1976 *Musical instruments of the world*. New York (邦訳：皆川達夫 (監修)
『大図説世界の楽器』 (東京：1981)) .

Hornbostel, E. M.

- 1933 "The Ethnology of African Sound-instruments," *Africa*. vi:277-311.

Hornbostel, Erich M. von, and Curt Sachs

- 1961 "Classification of Musical Instruments" (Translated from the Original German by Anthony Baines and Klaus P. Wachsmann), *The Galpin Society Journal*:14:3-29. (Original version: "Systematik der Musikinstrumente. Eine Versuch," *Zeitschrift für Ethnologie*. (1914) 46:553-590.)
- 1995 「ホルンボステルと C. ザックスによる楽器分類表 (「楽器の分類」資料)」 (田島みどり訳) , *NGSODJ*. 4:565-577.

MIMO Consortium

- n.d. "Revision of the Hornbostel-Sachs Classification of Musical Instruments," Classification of Musical Instruments, ICOM INTERNATIONAL COMMITTEE FOR MUSEUMS AND COLLECTIONS OF MUSICAL INSTRUMENTS. (<http://network.icom.museum/cimcim/resources/classification-of-musical-instruments/>). (2013年12月1日アクセス).

Peinkooper, Kerl

- 1976 *Handbook of Percussion Instruments (Handbuch des Schlagzeugs)*. London.

Sadie, Stanley (ed.)

- 1997 *The New Grove Dictionary of Musical Instruments*. (First edition: 1984). London.

Sadie, Stanley 他 (編)

1995 『ニューグローヴ世界音楽大事典』. 東京.

Sadie, Stanley and others (ed.)

2001 *The New Grove dictionary of music and musicians*. London.

Wachsmann, Klaus, Erich M. von Hornbostel and Curt Sachs

1995 「楽器の分類」 *NGSODJ*. 4:449-454.

• 視聴覚資料：

藤井知昭 (監修)

1994 『音と映像による新世界民族音楽大系』 (初版:1988年、VHS). 日本ビクター (VTML-201 ~ VTML-215).

1955 『音と映像による世界民族音楽大系』. 日本ビクター (VTML101-115).

5.2 個別楽器に関する文献と視聴覚資料⁷

1. キハーダ (Quijada)：

Peinkooper, Kerl

1976 “Jawbone (Quijada); Vibra Slap,” *Handbook of Percussion Instruments* (by Kerl Peinkooper). :159.

Sadie, Stanley (ed.)

1997 “Quijada,” *NGDMI*. 3:175.

2. バラフォン (Balafon or bala)：

Anderson, Lois Ann

1997 “Xylophone § 3: Africa,” *NGDMI*. 3:871-875.

Gourlay, K. A. and Lucy Durán

1997 “Balo,” *NGDMI*. 1:117.

Rosellini, Jim

1995 「ブルキナファソ 2. 楽器」 *NGSODJ*. 15:388-389.

• 視聴覚資料：

小泉文夫

1980 『西アフリカの音楽：セネガル、ナイジェリア』 (小泉文夫の遺産：民族音楽の礎：22). キングレコード (KICE-22).

⁷ 演奏を収録した適切な視聴覚資料については、現在調査中のため掲載しない楽器もある。

藤井知昭

- 1995 「ガウンデレ王宮のバラフォン演奏」『音と映像による世界民族音楽大系：9』
日本ビクター (VTML109).

3～7. ガムラン (ジャワ様式) (Java Gamelan) :

(体鳴楽器：グンデル・バルン、サロン・バルン、ゴン・アゲン、クノン、ボナン・バルン)

Gourlay, K. A.

- 1997 “Gong,” *NGDMI*. 2:60-63.

浜松市楽器博物館 (編)

- 2001 『インドネシアジャワ島のガムラン：企画展「ジャワ・ガムラン」図録』. 浜松.

Heins, Ernst

- 1995 「インドネシア II. 器楽アンサンブル 1 ガムラン」 *NGSODJ*. 2:88-91.

Kartomi, Margaret J

- 1997a “Gamelan,” *NGDMI*. 2:10-18.

- 1997b “Saron,” *ibid.* 3:299-230.

Kartomi, Margaret J. and Ruby Ornstein

- 1997 “Gender,” *ibid.* 2:35.

木村佳代

- 2010 「ジャワのガムラン音楽」『インドネシア芸能への招待：音楽・舞踊・演劇の世界』（皆川厚一編）. 東京.

佐藤まり子

- 1999 「ジャワ・ガムランの構造と技法の研究」『伝統と創造』（1998）:3-47.

• 視聴覚資料：

小泉文夫（監修・構成・解説）

- 2002 『小泉文夫の民族音楽 第9章 インドネシア2- ジャワのガムラン -』キングレコード (KICE-65). (スラバヤのガムラン演奏収録).

8. グンタン (Guntang) :

Kartomi, Margaret J.

- 1997 “Guntang,” *NGDMI*. 2:111.

MacPhee, C.

- 1976 *Music in Bali*. New York.

9. トンコリ：

アイヌ民族博物館

2007 『トンコリ』. 白老町（胆振）（アイヌ民族博物館）.

Hughes, David W.

1997 “Tonkori,” *NGDMI*. 3:607.

北原次郎太

2003a 「トンコリの戦後史-1945年～1977年を中心に」『千葉大学社会文化科学研究』7:9-18.

2003b 「トンコリの戦後史2 -1977年～1988年まで-」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』6:67-94.

(<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA11256001/KJ00004166055.pdf>)

甲地利恵

2001 「小泉文夫記念資料室のアイヌ音楽資料の調査・整理・公開」『アイヌ民族文化研究センターだより』15:3.

(http://ainu-center.pref.hokkaido.jp/HacrcHpImage/05/pdf/05_003_no15.pdf).

近藤鏡二郎, 他

1964 「アイヌの弦楽器"トンコリ"」『音楽学』9:13-21.

日本放送協会（編）

1965 『アイヌ伝統音楽』東京.

谷本一之

2002 「トンコリ（アイヌ）とナルスユク（ハンティ）-北の五弦琴の形成」（第16回北方民族文化シンポジウム報告 北方諸民族文化のなかのアイヌ文化-文化交流の諸相をめぐって）『北方民族文化シンポジウム報告書』16:33-36.

柘植元一

2001 「小泉文夫記念資料室所蔵アイヌ音楽録音資料」『民族音楽アーカイヴズにおけるマルチメディア・データベースに関する研究:音響を主体とするメディア統合をめざして』（平成9年度～平成12年度科学研究費補助金研究成果報告書）.: 46-89.

Sadie, Stanley 他（編）

1995 「トンコリ」*NGSODJ*. 12 :135.

「日本 VI 3. アイヌの音楽」*ibid.* :250-251.

・視聴覚資料：

金谷栄二郎

1992 『世界民族音楽大集成 4：アイヌのユーカラ』キングレコード（KICC 5504）.

加納沖

1995 「トンコリの演奏」『音と映像による新世界民族音楽大系 1：北・東アジア』（藤井知昭（監修）、VTML-201）.

10. ルバブ (Rebab) :

Kartomi, Margaret J.

1997 "Rabab, 2. SPIKE FIDDLES, (ii) South-east Asia," *NGDMI*. 3:178-180.

• 視聴覚資料 :

ランバンサリ

2013 「Rebab」『ジャワ・ガムラン：インドネシア中部ジャワ 青銅打楽器の輝き』
(浜松市楽器博物館コレクションシリーズ:44) . 浜松市楽器博物館 (LMCD-1972) .

11. チャランゴ (Charango) :

Schechter, John M.

1995 「チャランゴ」 *NGSODJ*. 10:511.

Turino, Thomas

1997 "Charango," *NGDMI*. 1:340.

• 視聴覚資料 :

Diaz, Julio Benavente

1988 "Charango fiel comoanero," *PEROU : CHARANGO ET CHANTS
DU CUZCO*. OCORA (C 559037).

藤井知昭 (監修)

1995 「コンドルは飛んで行く」『音と映像による世界民族音楽大系:14』. 日本ビクター
(VTML-114).

12. スィタール (シタール、Sitār) :

Dick, Alastair

1997 "Sitar," *NGDMI*. 3:392-400.

草野妙子

1995 *NGSODJ*. 7:523.

Powers, Harold S.

1995 「インド II. 古典音楽の理論と実践 6. 楽器 (i) 弦楽器 (c) シタール」*NGSODJ*. 2:60.

• 視聴覚資料 :

ヘゴダ, プレームダース

1995 「古典楽器の演奏シタール」『音と映像による世界民族音楽大系:7』日本ビクター
(VTML-107).

Nag, Sri Manilal

1991 *Sitar and tablà (The world roots music library 6)*. キングレコード (KICW85009/10).

13. ウード ('Ūd) :

Farmer, H. G.

1995 「ウード」 *NGSODJ*. 3:128.

Poché, Christian

1997 “Ūd,” *NGDMI*. 3:687-693.

• 視聴覚資料 :

Tanrikorur, Cinucen

1994 *Turquie*. OCORA (C 580045).

14. サーランギー (Sāraṅgī) :

Powers, Harold S.

1995 「インド II. 古典音楽の理論と実践 6. 楽器 (i) 弦楽器 (e) サーランギーとヴァイオリン」 *NGSODJ*. 2:61.

Sorrell, Neil and Mireille Helffer

1997 “Sāraṅgī,” *NGDMI*. 3:294-296.

Wade, Bonnie C.

1995 「インド VI. 民俗音楽 1. 古典音楽との関係」 *NGSODJ*. 2:71-72.

• 視聴覚資料 :

カーン, サブリ

1994 「サーランギー」『アジア・太平洋の楽器 : 1』 ACCU (UMIV-100).

Khan, Ud. Sultan

2008 *The art of Sarangi (The world roots music library 37)*. キングレコード (KICW85052).

15. サウン・ガウ (Saùng-gauk) :

Emmert, Richard and Minegishi Yuki (ed.)

1980 “Saun:gau?,” *Musical voices of Asia : report of ATPA (Asian Traditional Performing Arts) 1978*. Tokyo. :253-258.

Williamson, Muriel C.

1997 “Saùng-gauk,” *NGDMI*. 3:304-307.

• 視聴覚資料 :

ウー・ミン・マウン

1984 「サウン独奏」『世界民族音楽大集成 : 19 ミャンマーの豎琴』 キングレコード (KICC 5519).

藤井知昭（監修）

1995 「サウンの演奏」『音と映像による世界民族音楽大系：4』日本ビクター
(VTML-104).

5.3 その他の参考文献：

United Nations Statistics Division

2013 "Countries or areas, codes and abbreviations," *United Nations Statistics Division*.
(<http://unstats.un.org/unsd/methods/m49/m49alpha.htm>). (2013年12月1日
アクセス).

人間文化研究機構

n.d. 『統合検索システム』(<http://common1.nichibun.ac.jp/GlobalFinder/cgi/Start.exe>)

鳥谷部輝彦

2012 「発表要旨の整理：「伊福部昭の遺した明清楽器 - 東京音楽大学民族音楽研究所
寄託の明清楽器の修理について -」(社)東洋音楽学会東日本支部第60回定例研
究会 2011年12月3日(土)、発表者：甲田潤、稲見恵七」『社)東洋音楽学会東
日本支部だより』. 28:34.

塚原康子

2012 「報告：「伊福部昭の遺した明清楽器 - 東京音楽大学民族音楽研究所寄託の明
清楽器の修理について -」(社)東洋音楽学会東日本支部第60回定例研究会
2011年12月3日(土)、発表者：甲田潤、稲見恵七」*ibid.* 28:4.

6 付録: 楽器一覧に使用した HS 楽器分類番号の詳細 [MIMO Consortium n.d.]

- 111.211 直接単打奏体鳴楽器：単打奏棒。
- 111.212 直接単打奏体鳴楽器：打奏棒のセット：異なる音高の複数の打奏棒を結合して単体の音具を構成する。全てのザイロフォン。
- 111.222 直接単打奏体鳴楽器：単打奏板のセット：リトフォン（中国）やほとんどのメタロフォン。
- 111.241.11 直接単打奏体鳴楽器：独立ゴング：コブ付きゴング、コブなし（つばあり）ゴングおよび中間型ゴング。
- 111.241.21 直接単打奏体鳴楽器：ゴングのセット（ゴング・チャイム）：コブ付きゴング、コブなし（つばあり）ゴングおよび中間型ゴングのセット。
- 312.11-4 筒ツイター：切り出し弦式完全筒型ツイター：バチにより発音。
- 314.122-5 板型ツイター：共鳴箱式（箱型ツイター）：素手の指により発音。
- 321.311-71 棹型柄リユート：鉢型差し込み柄リユート：弓による擦奏。
- 321.321-5 棹型柄リユート：鉢型頸柄リユート：素手の指により発音。
- 321.321-6 棹型柄リユート：鉢型頸柄リユート：プレクトラムにより発音。
- 321.321-7 棹型柄リユート：鉢型頸柄リユート：弓により発音。
- 322.11-5 ハープ：弓型ハープ：素手の指により発音。